

# 映画放浪記

—— 映画文学人生論

色川武大 (1929-89)

『映画放浪記』 (1987-89) 「週刊大衆」 「キネマ旬報」  
参考： 西部戦線異状なし (1930) 監督：マイルストーン  
 巴里の屋根の下 (1930) 監督：ルネ・クレール  
 どん底 (1936) 監督：ジャン・ルノワール  
 望郷 (1937) 監督：デュヴィヴィエ

この当時、ヨーロッパだけでなく日本でも来るべき不幸に人々がおびえていた

和田勉監督の映画『麻雀放浪記』の原作者阿佐田哲也は雀荘だけでなく、映画館も放浪した。その放浪ぶりは「週刊大衆」に色川武大の名前で連載された『映画放浪記』からうかがうことができ。ただし、『麻雀放浪記』のような小説ではない。外国映画紹介のエッセイである。

とりあげられた外国映画を数えてみると、七十本、そのうち私が観たことがあるのはわずか十本。これでは私は外国映画ファンとはとてもいえないが、麻雀を知らなくても、『麻雀放浪記』の面白さがある程度はわかるように、外国映画の面白さは『映画放浪記』である程度は想像がつく。

解説を読んで、今すぐにでも観たいと思った映画を五本あげると、『西部戦線異状なし』『どん底』『望郷』『巴里の屋根の下』『巴里祭』。幸いなことに、そのうちの『西部戦線異状なし』と『どん底』の二本はDVDで観ることができた。『西部戦線異状なし』は反戦映画。ドイツでは上演禁止になり、日本では上演されたものの、検閲によって問題箇所がカットされた。

『どん底』はゴリキイ原作で、帝政ロシア末期の民衆劇だが、ジャン・ルノワール監督の映画はフランスの雰囲気漂う。二つの世界大戦にはさまれた谷間のような時期（一九三六年）を反映して、ペシミステイック（運命主義的）なドラマ



## 映画放浪記

映画文学人生論

に仕立てられている。

主な登場人物は庶民のペペル（ジャン・ギャバン）と没落貴族の男爵（ルイ・ジュールヴェ）。破産して無一文になった男爵の邸宅にペペルが泥棒に入ったが、金になりそうなものは何もない。死を決意した男爵は最後の晩餐でペペルと気が合つて、とうとうペペルたちの住む木賃宿でどん底の住人たちの仲間になる。ペペルはいつかはどん底から脱出しようと思つているが、男爵は掌の上を這う蝸牛を見ながら、「俺はもうどこへも行かない。ここで死ぬさ」と達観している。

この当時再び戦雲が濃くなつてきて、ヨーロッパだけでなく日本でも来るべき人々がおびえていた。しかもその不幸はどうしても避けられそうもない。運命を信じるか、徒勞に身をまかせる諦観の境地か、それとも自由と新生の幻影を抱くか。このような当時のフランス映画がかかえた命題に色川たち日本の若者は反応したようだ。

『望郷』の主人公ペペル・モコを演じているのもジャン・ギャバン。凄味のある場面や不思議な愛嬌を見せる最盛期のギャバンをスクリーンでは非見たいと思うが、いまだにその機会がない。

『巴里の屋根の下』と『巴里祭』はパリの下町の風俗を描き、この二本ですっかりパリ人気を日本に定着させた。昭和十年代当時の映画の力は大きかったと色川はいう

夜でも昼でも 牢屋は暗い ゴーリキイ